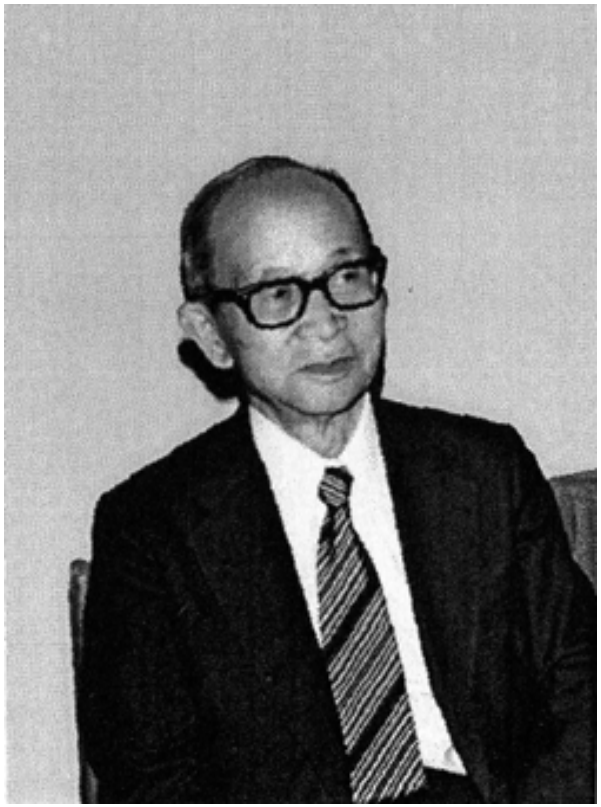
川柳句集

卍（まんじ）

安藤魔門

著者



川柳句集

卍

魔門

「卍」　目次

題　字……安藤魔門
写　真……著者
序……瀬古義信
川柳の開眼
空白時代
出版　結社の自由…
コロニア川柳の国際化
幾山河の句碑
一叩人と相識る
南無　三宝
自己の限界
句碑について
一九三一年　ー一九九一年
あとがき

序

頭の中に霞がかかっている昨今、魔門さんとの出会いがどんな形で、何時何処でと探るのであるが、鮮明には浮き出て来ない。

ルア・コンデで行われた全伯第一回川柳大会といっても十四、五人ではなかったかと思う。

それが最初のように思うのである。第一印象は直立不動でニコニコして言動もパキパキした頭の切れる人だなあと言う感じであったが、あとで知ったのであるが、日本で海軍中佐かの家で書生をして居られたとか、成る程なあと思い知らされたのである。

以後半世紀も親交を深めて来た柳人仲間とか友人と言うには少しおこがましいが、他に適当な呼び名が見つからないのでそのまま今日に至っているが、何年か前に古い川柳人との意味で大会の席上魔門さんを始め私も表彰されたことがある。年は半ダース程上の様に思ったからもう九十才は過ぎられたかと思うその魔門さんが句集を出されると言う、心よりお目出度うとお祝い申し上げる。お互い生きて来た道は違うが川柳という一本の糸で強く結ばれて来ているのである。

お互い感情を持つ人間の集り趣味仲間と言えども時

には嫌な事の一つや二つあっても不思議ではないが、魔門さんとの間にはそのかけらもないと言う事は魔門さんのお人柄で今日まで導いて頂いた事に深く感謝するのみである。そうしてこの年になられるまで傍目はされず川柳一本に生き抜いて来られた事は尊くも教えられるのである。

魔門さんの句の中にはスーツと読んだだけでは素通りされて終いそうな作品が多いという事は一寸抽象的な匂いがするからであろうが、噛めば噛む程味の出て来る意味深長な作品が多い中にもお茶漬けの味のような「お早うが言えてあなたも平和主義」とサラリとした作品もある。永年温めて来られた作品群だけに、きっとブラジル柳界だけでなく、広い話題になることであり、ブラジル川柳界の誇りであると確信する。

この句集で満腹感にならられず

「百までは綴ってほしい柳のうた」　義信

お元気でますます佳句を発表して下さい。

心より句集発刊を祝福いたします。

一九九七年六月

瀬古　義信

川柳の開眼

一九三一年珈琲契約農の折り、総合誌「改造」にて、井上剣花坊の川柳の文学性に触れその虜となる。早速、コロニア唯一の雑誌「農業のブラジル」の川柳欄へ投句、選者、藤原鬼念坊に師事、ほどなく選者は、堀田栄光花に代わり、仝氏の指導を仰ぐ。

空白時代

ブラジルの国粋化による、外国語の出版物の禁止と、生活の転化、「農業のブラジル」の廃刊。

一九四一年一二月七日に勃発した太平洋戦争、そうした内圧、外圧により十有余年の長期に亘る空白を抱える。

出版、結社の自由

一九四五年、戦争終結の後、自由の時間が戻ると、逸早く「よみもの」が柳壇を開設、高野悟迷亭が選者に就くや、「農業のブラジル」柳壇の古い同志と供にこれに拠る。

次いで一九四九年、日伯毎日新聞が、堀田栄光花を選者に迎えて柳壇を開設、川柳はここに新らしい息吹きを生じ、翌五〇年には「ぶらじる川柳社」を結成、主宰に栄光花を据え機関誌「ぶらじる川柳」を発刊するに至る。

編集に川下白舟、会計に安藤魔門を推す。

こうした状況を踏まえて、第一回全伯川柳大会を開催、大会は続いて今日に及んでいるが、この間、「日毎杜」の全面協力を得て、多年に亘り主催を引き受けて、川柳発展のため尽くして貰っている。

また、編集の白舟の辞任の後を魔門が引き受けて、会計と併務する体制となった。

既述の第一回大会と同時に白舟の斡旋で、日本の「川柳人」の誌友となる。仝誌は剣師の衣鉢を継ぐもので、既に剣師の直弟子である栄光花によって新興川柳の道を歩いていたので、一段と拍車がかかることになった。

兎角する内、同誌の同人に推され、時の編集長高木夢二郎に兄事、革新川柳の道へ傾斜して行った。

コロニア川柳も次第に同好者を増やして来たので、一九五八年（移民五〇年祭）サンパウロ新聞も柳壇を開設、選者に安藤魔門を擁し、魔門は留まること二〇年、後を黒田不知火に譲って去った。

コロニア川柳の国際化

一九六三年、ニューヨークの川柳、万発端吟社が創立十周年、北米川柳発祥五〇年を記念して企画した「インターナショナル川柳誌上大会」の開催に招聘を受けて参加、ここに始めて海外柳界と接触、この触発を受けて、以後の全伯川柳大会を国際色豊かなものとする。

選者を広く海外に需め、日本柳界からは著名な吟社代表に選を依頼、札幌の曲川立歩、吏京川柳人の渡辺尺蝮、姫路の川柳研究家、時実新子、岡山ますかっとの主幹、大森風来子、熊本の噴煙代表の大嶋涛明の五大先達を煩わしたが、いずれも系譜系列を異にする上から見て川柳の多様性を学び、視界を展げる結果を招来することが出来た。

猶、他のアメリカ、アルゼンチン、ペルー、メキシコ柳界からは、それぞれの吟社から交替で選をお願いすることにした。

この度の誌上大会を機縁に、ブラジル柳界の担当であった西岡南月坊は、前後二回サンパウロを訪問、ブラジル柳界の発展を祈念して、新生吟社が実施している「紙上選」に共鳴多額の寄付を惜しまなかったが、その使途は毎年、「紙上選」の年度賞第一位にトロフィーを贈る事にして、その寄付金は魔門個人に委ねられ、魔門

が健康を損ってからは、飯塚朝子に引き継がれ、十年の永きに亘って続けられた。因に紙上選の企画は、岡村鈴蘭と亡夫さとほろ二人の発案になるものである。

幾山河の句碑

かって聖市中心区のガルボン・ブエノ街を基準に一帯が東洋街と市役所より認定され、それに相応しい諸施設が進められていたが、大阪橋の側の空地を日本庭園とすることが決まり、仝庭園を造るに必要な樹木一切を取り仕切る事を提言して容れられた、石山白頭は条件として庭園内に「句碑」を建てる事を容認させ早速魔門へ句を選べとウムを言わせぬ情熱に、他に迷惑をかけぬことを黙約、即座に「幾山河」の句を提示して、東洋街造成委員長の認承を得て建立になったもので、元より句主不在は問題の外である。

一叩人と相識る

一九八〇年の初頭、川柳人の高木夢二郎編集長の紹介で一叩人と相識る。仝氏の個人誌「東」の恵贈を毎号受けるようになったが、誌は全部ガリ版刷りで手製、内容は厳しく烈しく政治、軍事、文化の矛盾に抵抗するも

ので、反戦川柳人、鶴彬の生涯に光りを与えるべく、十有余年の歳月を費して東奔西走文字通り鶴彬の足跡を訊ね、その資料を追って命を賭けての労作「鶴彬全集」三部作が成ったが、総て「東」同様ガリ版刷りの手製でこの限定数の中から特に贈られた全集、貴重なものであったが、私の個人的な事情からサンパウロのブラジル日本文化協会へ寄贈す。

この全集によって、「川柳」の何たるかを深く考えさせられるところがあった。

所謂、川柳の原点である。

南無三宝

一九八六年、八〇才の折り、過労を重ねていたのか突然倒れて、思考が停止、廃人同様となり、ＴＶもラジオも読書も一切を放棄、関係機関の職責も退き、専心療養につとめ、漸く一年にして幾分回復に向かい、川柳創作の意欲も動いて来たので、試みにペンを執ってみたが、とても昔日の比に非ず、魔門の名を用いることが憚かられたので、「南無三宝」と改名、諸兄姉の驥尾に付く。

斯くして一年、ロンドリーナ大会の折り、出席の諸兄姉より、魔門に復すようにとの暖い友情に甘えて駄馬に鞭打つ思いで、柳友諸賢に応えることにした。

自己の限界

一九九〇年、齢八四才にして自己の限界を知り、漸く一切空の境地に達したので、身辺の整理にかかり、翌九一年病妻と供に「厚生ホーム」に余生を託すことにしたが、唯一の私自身を記録した「川柳」を焼却するに忍びず、これを託すに飯塚朝子を以て今日に至る。

顧みて猶今日あるは、既に亡き人を含めて全柳界に於ける大先達の指教と叱咤激励であり、同志諸君の変わりなき友情であり、且つ手にした「柳論」「句集」など、川柳と名のつく限りのもののお陰である。

魔門記

「句碑について」

サンパウロ市、ガルボン・プエノ街の庭園にある「幾山河ここに恋あり命あ里」の句碑は故あって、読み人知らずになっているが、著者も書いている通り、東洋街造成委員長の承諾を得て建立されたもので、紛れもなく安藤魔門の作品である。

コロニア川柳の歴史と共に、不滅の光りを放ちつづけるであろう。

編　者　（黒田）

一九三一年～一九九一年

幾山河

ここに恋あり

命あ里

太陽の光りを避けて闇に生き

窓という窓に恋する服が動き

コロノの名に甘んじて草を刈る

庭石の苔に千古の風を知り

乗合いに野郎ばかりの馬鹿話

ウンサッコ拾参ミルの米の味

棉作り大阪の夢京の夢

君が代を歌えば泣けてくる異国

恋を知る娘の美しさ悩ましさ

兎に角貯めた奴が英雄

人の来る気配に野栄位置を変え

カボクロを騙した奴が王になり

土地を追い土地に追われて刻む皺

銭を算えて未だ死にきれず

触角が探し合ってる敵味方

飛び降りて見れば此処にも生きる道

古橋に八千万の眼がうるみ

振り上げた掌を撫でて春の風

語らんか移民祖国を離れた日

諦めた笑いに仮借なき拍手

ノスタルジア山河別れし時のまま

年の瀬や不景気を知る慈善鍋

郷愁の烈しき夜は酒を酌む

神の声悪魔の声を聴く夜なり

旅に出る今朝の茶柱よしとする

日本に夢のある日の蜂雀

恩愛に狎れて小さな謀叛心

鍬千里移民愛しき夢を抱き

孤影いま静かに秋の陽を刻む

原始林を焼く煙幾条春の色

街路樹は緑狂人の眼・眼・眼

雨の日の港に悲し移民船

天空を行く旅もあり牛車

八面鏡みんな私の姿です

寒風や物乞う人を顧みず

一握の土の温さと冷たさと

蓬春と呼べど淋しい後ろ影

一徹の磁針南を肯んぜず

華やかに着いた移民のちぢれ髪

移民船闇屋は別な顔でいる

美しい夢ばかりなる移民船

移民祭帰化手続きを疑わず

百万の都市百万みな他人

味噌の香の流れてここは日本街

鍵などは要らぬ掘立て小屋の春

提灯の明るさだけの闇を行く

十字星想いは同じ草枕

墓一つ守る術なく転耕す

無駄飯は食わぬ心算の髭を剃る

物価高乞食生業守りつぎ

不良児の眼に青空は蒼く澄み

百万の骨空虚なる鐘を聞く

炎天に流す涙を汗と云う

吾が影の地上にあれば愛しかり

別盃を挙げて非情の渦に立つ

地上みな疲れて太陽の目が真っ赤

神聖な汗とは別な市場価値

倍増と麦の比重をたしかめる

原子雲名画となる日考える

原爆の谷間で黄色いさくらんぼ

野心未だ捨てず空拳空を打ち

芸が身を扶けて女遠くいる

拝賀式去年の顔の誰か欠け

民主々義数を集めただけの芸

退避壕余った奴は死んでよし

馬鹿騒ぎ馬鹿にもなれず一人いる

牛の糞匂うて秋と云う自責

旧悪を隠す心の厚化粧

ハンカチフ白きが故に涙あり

出生ーーーー死亡

土に還る土の怒りの焉る日に

任せてもおけない国際収支なり

処女炎える白き白き炎

乳と蜜流れて灯には遠い里

捕まって不服少年掬摸

楽園と謂われる国で痩せている

行く雲の影を写して水無心

人間の甘さを酒で中和する

権門の前に歴史の伸び縮み

着飾った視線はげしく絡み合い

人類の悲願見事な灰神楽

静かなる行列ミイラの喪章が赤い

試練に堪えて小さな善人

落塊の身に古里の遠いこと

笑うにも泣くにも足らぬ過去を持ち

同病相憐んで酎にする

助けてくれ安全地帯の悪鳴

運命を知り天命を知る辰

大空の広さと別な篭の鳥

都市住まい男意地なく菜を育て

百年の運命決す日に対す

生傷は絶えず茨の道はるか

生命を絶つ日その日のために生く

壁の絶叫を聞く影のない眞昼

血の色は褪せ黄金の色は濃し

残飯の恩に報いて吠える犬

倖せは働く者に夜があり

ひねくれた松も若芽は天を指し

絶対の境地静かに澄む眸

生きてあり新日本の宣言書

神の名を騙りて虚偽の世に生きる

革新の炎が消えて残る愚痴

気も魂も尽きて血を吐くそれもなし

すり切れた神経風を聞くばかり

キリストの国に堕胎の骨の数

手を拱いてーー無為

諦めた移民にかなし故郷の唄

先頭の一歩に後尾ただ喘ぎ

感傷もなくて異人の中に居る

逆わず奴隷代々恙なし

労働歌唄い疲れた午後三時

無風帯暴風雨の夢を抱いて無事

凡情の名残りも風が吹いている

墓も名も残さぬ父の霊に謝す

吐き捨てた笑いへ怒り座を占める

そこばくの郷愁柳青かりき

無精卵鶏疑わず産んで老い

低き鼻苦心を秘めしコンパクト

唇の余りに近き満員車

ああ神様髭が髭が生えてます

無名指に光る生命の春の色

鉄の意志叩けば哀れ錆びた音

罷業など出来ぬ私はお百姓

例外があってどうやら生きている

天高く地は痩せ人は飢えんとす

慰謝料で済む貞操の婦政権

御破算で願って見れば又違い

人間不信況んや神や仏おや

旅の果て地の果て吹くは風ばかり

紙の舟稚き夢の豊かなり

コロニアの総意或る日の四畳半

地の果てに母ある如き雲の色

古里を捨てた移民の子守唄

満員の電車脂粉の香を乱し

俄か雨あきらめ切って濡れている

寸尺を逃れ天下の座にすわり

野性美の魅惑原始の血が疼き

とりどりの水着に風も柔らかく

一枚の死亡届けですむ命

落ちる陽へ農夫合掌して貧し

保護色の虫に隠れてあった剣

一糸なき美の鑑賞に驚かじ

血を吸った百鬼月下に哄笑す

生き延びて花一輪の春に逢い

人形を抱いて小さな母性愛

地熱まだ冷めず地表の無駄話

歯には歯を人智原始に還るだけ

泣くよりは悲しき笑い笑わされ

鳩一羽飛ばす努力をクレムリン

軍靴また地表に鳴るか秋の風

空腹が満たされそうなお念仏

詩人みな故郷を捨てた不孝者

九月七日静かに妻と茶を喫す

不覚にも涙を吸ったパンの屑

死期近き枕に林檎赤々し

唯物論胃の腑の在りかしかと知る

ストロン九〇セシューム不幸な言葉を覚え

奴隷市涙の跡も四百年

古里は貧しき味噌の香に残り

パスポート郷愁古りぬ一万浬

十字星　星は語らず移民塚

丸太小屋我が生涯の灯をともし

卑怯者だから私は生きている

乾からびた顔　顔　顔太陽は真っ赤

一対一大都のネオン発情す

さびしさは答うる風の空に消え

ネギの花或る日の風に戯れる

柿一つ動かぬ秋の色を占め

金の鞭高鳴る下で今日を生き

ボロボロの生命労わり書く詩片

政治危機わが関心は金のこと

またパンが騰り夏痩せまだつづき

ご無沙汰の友は小金を貯めており

新移民などと勿体なく呼ばれ

楽天に生きる余技あり川柳誌

郷愁もなくて洟すすりあげ

敗戦の記憶の底に触れて見る

歯の抜けたまま秋風を聞いている

久々の野糞に青い空があり

廃物利用とは雑巾の断末魔

月すでに童話を捨てた光りよう

裏道のある風景を画きつづけ

悪人になれ悪人になれ安藤善兵衛

よろめけばやはりよろめく影法師

敗戦のお陰金運座を占める

人間の汚点を隠す尾てい骨

移民祭その花道に宮殿下

幸いなことに人畜無害です

救いなき怒りに春を寸断す

発止脳天を打つ金一封

無為無策顔を集めただけのこと

笑うべし泣くべし　ＳＵＭＯＧ二〇四

所得倍増岩戸神楽を舞いに舞い

人生の限界を知る白髪染め

空白の座で踊っている骸と骸

無駄話まだまだ生きる夢を持ち

アスファルト一直線に延び不毛の沃野

鈴蛇の鈴を手にして移民夜話

一握りの土×一握りの生命

誕生日祝う御空の原子雲

分かれ道帰る故郷のないおいら

糸車幼き夢を手繰り寄せ

大いなる夢が崩れた日の孤独

石つぶて投げる怒りの哀しさに

生き延びて春なお暗き庭に立つ

返り血を浴びて一本蝿叩き

運命に抗し末座に頓挫する

天が下隠れ家もなき放射能

玉砕はせぬ日本の防衛論

眼の届く限り悲しむ色もなし

人間の欲の果てなる土饅頭

小心翼々罪の意識に頓首する

ギリギリ痛む胸に十字架の毒舌

再びは訪うこともなき樹下に寝る

インフレとデフレキリキリ舞う庶民

底辺の広さに骨を積み上げる

硝子玉なれど私の首飾り

天国へ往く心算懺悔積み上げる

柳情で結ぶ地球の裏表

低姿勢後ろに続く自衛隊

東京五輪悪夢は遠く海に捨て

踊りましょうか丸腰の自衛隊

世上紛々愚かな思索まだ続き

思い出を抱けば冷たい風ばかり

責任の所在を衝いて飢餓の群

拍手するだけの両手となり果つる

歯車の血をしたたらし滴たらし

星条旗風も咽ぶかワシントン

落城の悲運歴史に生き残り

日盛りを男盛装して無惨

憤激の名残り孤高の富士の山

利害交錯して拒否権白々し

共稼ぎなお問題のありすぎる

火を噴けば男火を抱けば女

自他共に許した後が怖しい

エキストラたった旗振るだけの役

形而上の争いならばチョンにする

藁人形に心臓の鼓動を探す

抵抗の限り無惨なあばら骨

少年の夢一ぱいのなぐり書き

必要悪栄え野良猫共の饗宴

控え目にしてはおられぬ花吹雪

水増しをして空白を塗りつぶし

深海魚生きる生命の厚化粧

世界的規模で笑える日が欲しい

誘蛾燈哀れ男の狂い死に

花一輪自他を許している不幸

自他共に不信街路樹葉を振るい

草が萌え樹が萌え傾斜する思念

拍手が出来ないので足を踏み鳴らす

もう泣かなくなった傷だらけの人形

全身で泣けば怒りも静まらん

歴史の歯車を廻す奴隷の集団

光陰は待たず還らぬ影法師

アマニャンがアマニャンになる知恵が要り

（注・明日）

お早ようが言えて貴方も平和主義

堂々とギャングが跳る大聖市

生命の浪費を続け駄馬の群

約束を二重に守り夏時間

眼に余るばかりなる世に黙す

証文の要らぬ銭を借りてくる

黙秘権無駄な時間を無駄にする

国連の場では足りない場所が要り

死にたくはない臨終の指の先

リズムには乗らぬ貧乏ゆるぎです

偽善偽悪かいなくたたん世に生きる

処女捨てる道具が揃うカルナバル

（注・カーニバル）

歩くことに慣れて月日を友とする

独学の名残り孤独の灯を愛す

破れ靴足に不憫の墨を塗り

金の鞭高鳴る下でイエス　サア

魂のないコロニアの後ろ影

拳銃を持てばしきりなる殺意

次元の違う話で茶ばかり飲まされる

火の雨が降る未来への懺悔録

微塵子よじたばたしても水面下

野火燃ゆる赤き思想のこと言わず

お節介が好きアメリカと言う男

実一つ残さぬ花で潔よし

一輪の花あり妻と温くいる

ものや思うものの哀れを知りしより

太陽の下で百鬼の無礼講

奴隷の生傷が絶えないアメリカの接点

民族自決この空腹を如何にせん

地熱徐々に冷えて人間不在の歴史創まる

尾てい骨をぶら下げ人間の進化論

鶏と卵の論争に葬儀車が続き

平価を切り下げ単位を切り人間を切下げる

足跡を遺せば駄馬として足りる

煌々と月に土足の跡もなし

残照に赤く燃え立つ影法師

汗臭き移民で今日の赤頭巾

人生の比重を支え老の影

総入れ歯無念白髪はまだ染めず

落つる陽へ農夫合掌して貧し

哀歓の限り夫婦の影たしか

人生の虚実の中の己が影

役不足言わず大事な馬の脚

漆黒の闇に一筋赤い血の指向

友情は嬉し師恩は有難し

悲雨惨風産着は千々に破れたり

汗臭き男で案山子にもなれず

老醜の我れをいたわる影法師

哀歓の限り果てなき地平線

公害の生き抜く親子の曲った指

堂々と妥協も虚偽もなき裸身

ぬらりくらり生きている政治論

再見は期せずしばしの情を欲る

夢を奪われた少年銭を算えてる

アメリカの料理を食ったベトナムの腹痛

国土分断され蚯蚓となって生きる

万難に向う覚悟の笑顔です

風速〇メートル胸の痛みに堪えている

季節風流浪の旅のまだ止まず

灯をつけて太古の闇を深くする

火の色となり言葉は不要

自我の曲舞台は派手な核装備

追うことに疲れた足を抱いて寝る

新聞に疎遠の友の訃を見つけ

大都市の流れの底に蹴つまづき

氷原の南も北も既に基地

二から2へ移る経理の社用族

ゆうゆうと物みな動く春の曲

自己主張明治の男生き残り

氷点下愛は真っ赤に凍りつき

落日の命が燃ゆる地平線

生命の尊厳大統領と乞食

王冠に不埒な蝿奴糞を垂れ

風を掴めば空歴史のない瞬間

熱譜生死を綴り破れた楽器ばかり

天才のどこか冷たくひとり居る

ノスタルジア凡愚の踊りまだ続き

たらちねの故郷を知らぬ子と生きる

星の下酔えば茶碗も叩きたし

霊魂不滅今日五衛門に突き当たり

ノイローゼたしか故郷は良いところ

憎まれ児世にはびこって叙勲沙汰

行き暮れて肱野の果てに灯を守り

空を飛ぶ夢天皇と会った夢

有難や神も仏も金が好き

愛憎の極限にいて夫婦なり

明暗を写し心の影となる

倒産続出河は濁ったまま流れ

転落の花一輪の詩を綴る

国民の収支が決まり四月馬鹿

正直の頭に十字架たたき込み

風媒花案山子男としての威儀

ミニサイア女おんなとしての意地

（注・ミニスカート）

天を憎み地を憎み銭を愛す歌

雪霏々と歴史の汚点かくすかに

開運の神はすすけたまま在わす

沈黙の触れれば涙こぼれ落ち

迷いから醒めた証拠の墓一つ

人生の峠不惑の名に愧じる

拒否権がある国連の多数決

原爆忌平和に遠き空の色

弱いから一歩先に出る

イエスマンたまにはノーと言ってみろ

万雷の拍手の中を皇太子

君が代大合唱となり六拾万の感激譜

美智子さま日本一のおん笑顔

皇太子片手を上げ万歳秋空と和す

ものや想うものの哀れを知りしより

香煙のただ一條の祈りかな

八月の空へ呪いの言葉吐く

中流意識この華麗なる奴隷たち

野良犬の不屈は人に尾を振らず

謎かけて謎かけられて夏の月

どん底にどん底だけの陽が当たり

忘却の今宵を生きる血を求め

シャレ頭並べ平和を謳歌する

東西南北血で血を洗う線を引き

ソロバンを弾く男で平和主義

神在すやたらと金の音をさせ

風船爆弾歴史に残る風が吹き

敗戦の傷を米貨で包帯し

紫電闇をつんざき捨て身の避雷針

人生へ巧まぬ過去の二ツ三ツ

ボリビアの草を血塗らしゲバラ死す

戦争の悪夢へ暫しミニサイヤ

平和炎上マッチ無罪を主張する

ともしびのいよいよやみをふかくする

貞節を哀れ月下の美人草

昭和元禄空にデッカイ核の傘

堂々と惚けて悪心更になし

人間疎外壁の厚さを誇称する

コロニアの遺産となるかのど自慢

幸せを追駆けている不幸

朕が私に変わり円はそのまま百余年

自他共に許せ六十年の夢

核爆で威しの効かぬ国が増え

大陸の孤島に綴る海の歌

終りなき旅ぞ一ツ捨て二ツ捨て

平和への偽装原爆吊ったまま

海おどろ移民の胸に鳴り止まず

建国日決まり明治も近くなり

住み慣れて異国の土の日々温し

貞婦二夫に見えて金銀チラツカセ

泥棒会社の株はいかがです

途中下車出来ぬ私の終列車

栄光のやがて去りゆく椅子に就き

嘘が生きている私の玉手箱

日本の悲劇は金がたまり過ぎ

引力を断ち切って臍のない胎児

青春の隙間を飾る花言葉

終極の露なき花の床に臥す

雲動き動き人生多事多難

忘却の時差を生きつぐ酒を酌む

傘の下いつまでつづく花の道

芥溜めを漁る烏と私と

歴史の流れに引っかかっている人間の芥

被写体の生命が躍る臍の位置

アポロ飛び宇宙紀元の陽が昇る

石と語る孤独の影を地に埋めて

法律と坊主が邪魔な安楽死

空しさを労わり孤独の影を抱く

窮極の笑いを求め死を求め

我楽苦多を集め人生また楽し

春風秋雨歴史を刻む石畳

平和への希い血染めの石つぶて

住居難悪魔と仏も同居する

追いつめた利潤に足を掬われる

雲低く天に連なる風が吹き

主義主張生きる命をいとおしむ

大寺院ここ小便の垂れ流し

過去となる今日の一日を命とし

生涯を托すに足らぬ奴ばかり

過去ばかり並べて神の黙示録

木々芽ぶく老の感傷振り切って

叩かれて意地ある釘はみな曲がり

空しさを労わり抱く己が影

運命というも愚かな雲に乗り

暗雲の渦巻く中の無風帯

敵味方ともに十字架吊っており

昭和史を閉じる最後の御名御璽

改葬の燭骸が笑う娑婆の風

太陽の届かぬ位置で辞儀をする

計画図に当たりエコノミックアニマル

移住者と呼ばれ移民のなれの果て

馬齢相重ね申し訳是無候

異常から異常へ風も吹き抜ける

流れ星雄図空しき男たち

三島死す空に御神火燃えつづけ

念仏を唱え斬人斬馬剣

宇宙葬大智極まるところまで

雲流れ木の葉が動く思慕となり

雲の変心へ風は螺旋階段を昇る

戦争と平和相手に不足なし

雑踏の中で己れの影が無い

体制のひずみへ黒い血が流れ

動くもの動き動かぬ俺一人

ひれ伏して地平に長き己が影

歯には歯を地獄の罪を深くする

鍵一つ闇の深さに落ちて行き

黒バラの一輪しずかに潮満つ

海鳴りの遠く別れた日の山河

石つぶて投げる怒りの哀しさに

俺は此処に居る聞こえぬか馬鹿

虹の素顔の息の根を止める

敗走千里月まで逃げる道が開き

農不振人事を尽くし逃げるのみ

零を億あつめコンピューター必死

零一つ国家予算を慌てさせ

寿命延ぶ更に不幸を重ねんか

言葉貧しく　ー　茶碗を割る

夜だけが味方毒には毒を盛り

祖国喪失蝶の骸を額にする

花盛り陽盛り明日も天気なり

ギリギリに来た拳骨の懐手

人生のたそがれ道も細くなり

落書きの歴史が造る文化財

戯画燦としてＳＥＸを披露する

正装をすれば尻っ尾が邪魔になり

色も香もなくてお化けの枯れすすき

ゆり篭の夢公害の花の下

街角に夢がある日の街雀

死線すれすれまだ生きている薬瓶

青空へ静脈青く青く透き

烈々の至情人類愛の中

獄に坐しなお自らを疑わず

反戦柳人鶴彬として祀る

血と砂で画く地球の大壁画

そうろうと父が形見の涙壷

死に顔のやっと人間らしくなり

振幅の狂い勝ちなる鳩時計

南無是空失うものもなき吾に

ラッシュアワー明日を生き継ぐ影を背に

カンテラの暗さを政治逃げ廻り

年輪の重さに堪えている古木

国境を正す理論の火を冠り

功罪を織りなし虚実の彩を塗る

陽を妊み冷たく燃ゆる硝子玉

敗走千里歴史を創る意地を持ち

沈黙が破れ烈しき風と風

日暮れて駄馬に鞭打つ愚を重ね

使い捨て此処にも人間層の山

猫とルンペンわが半生の記録とす

紙礫恋の恨みのあるやなし

群雀の夜の深さへ黙り込み

燈芯のただ一すじの祈りかな

星の降る夜の深さに身を沈め

上潮の魚臭の町の移民宿

星と語る疲れし影を地に這わせ

蛇穴を出て一山を虜にす

音痴また唄えば音痴拍手する

札束に追い回されている不運

はったりが効かず妥協の宴につき

老残の明日なき影を背に負いて

経文を誦し一椀の重さかな

生首を天下に晒しピーナツの饗宴

雲幾重過去に繁るバラの棘

政治構造中にどっかと馬の脚

回春のどこか淋しい白髪染め

やり場なき怒り原爆落ちて見ろ

喜寿米寿邪魔にもならず生き残り

三十年喰らい続けた胃拡張

事故多発炎天の下犬交尾る

雑兵はキラキラキラと野垂れ死ぬ

急ぐこともなかろう墓場も見えて来た

地球に穴を開けて石油よ出てくんろ

人形に未だ夢がある青林檎

原点に立つ釈尊は真っ裸

返り血で染めたベトナム独立旗

ベトナムに春立ち返り立ち返り

公害に汚れきったる日銭受く

公害にひねもす鳴かぬ鳥となり

死魚の目に吾が亡霊の影動く

動くもの動き虚しさだけ残り

砂漠の灯遠く平和の道峻し

足音の虚しさ過去が逃げてゆく

逆算の哀れだんだん猿に似る

二次元の世界に挑む漫画です

人権の行方迷路の七曲り

犬共も痩せて養老院の秋

老残の空しく遷る雲の彩

農地改革美田の中に米がなし

背を向けたまま北風を聞いている

飢餓線をゆく狼の眼が光り

被写体が少し動いて幕となる

絢爛の舞台人形劇終わる

記憶喪失逃れる術のあるやなし

放心のまま秋風を聞いている

水深の深さへ影を横たえる

空間を埋める言葉に疲れたり

残照を裏切る僕のぼんのくぼ

人権に熨斗つけようか剥がそうか

年輪を一つ転がし過疎の村

サハリンの海暗くして機影絶つ

恨む可し雲はちぎれて二百六十九人

蜘味の糸たしかに女の貌がある

無駄飯を食った証の墓一つ

近代化万死に当たる法を持ち

歩道橋大都の春を寸断す

これが俺の顔か鏡の馬鹿

空蝉の愛の名残りの爪の跡

軍拡の続く限りの平和なり

地球病む天使が纏う火の衣

雲の一点に火を点じさあ逃げろ

死線すれすれ天下に恥じぬ糞を垂れ

そうろうと流れの果ての鎮魂歌

粛条と夢の起伏の鍬の跡

死に急ぐ我に引導無用なり

人間のルーツ尻ッ尾がぶら下がり

島還せ涙が凍る北の海

潮満ちて遺言状が流れつき

常夏の冬が身に染む年となり

生き延びて地球の最後見届けん

馬齢また加えて重い馬の脚

闘いに疲れてひとり荒れた掌よ

経済か軍備か死線横たわり

引力を断ち切って臍のない胎児

結論を急ぎ仮定の上に立ち

原罪を隠す木の葉を憎まんか

死に神にカラオケ一つ唄わせろ

骸骨を虚空に浮かせ通り雨

絶唱の幾年木霊は還らない

聖風に坐せば胃の腑が透けて見え

奈落への歩幅が狂う喜寿米寿

人間の叡智を捨てに来た渚

はらわたを曳きずり蝿の逃げゆくよ

空き腹へ政治倫理の処方箋

百花踏み砕き一粒の麦を蒔く

仮説組み立て見事なる虚構

食糧危機雀に餌をやったかな

権力に踏みにじられた頭蓋骨

怨念の七生祟る修羅の庭

掴まらぬ太陽裏の蝙蝠

外債を背負う胎児の背番号

引き金を絞れば天地真っ二ツ

喰い荒らす国旗の裏の鼠ども

デカダンか虚無か万歳裏長屋

褌を締めても身ぐるみ剥ぎ取られ

天高く飯が焦げてる女権論

離合集散手の鳴る方へ転ぶ奴

諍いの空しさ花も散りぬるを

サリー朱に染めてヒマラヤの風寒し

名画ともなるか原爆地獄図絵

美しき嘘美しき天女たち

葬列にひとりぼっちの道つづく

過去を焼く魔子は百鬼の面をつけ

難破船流れの果ての無風帯

被写体がすこうし動いて幕となる

南無是空　「卍」　と結び絶つ命

生き残る心算核戦予算案

日輪を孕み柳魂天翔ける　（三宝）

夢幾つ崩れくずれて移民の死　（三宝）

生き甲斐を求めて死出の草鞋穿く

南無是空　「卍」　と結び絶つ命

生き残る心算核戦予算案

日輪を孕み柳魂天翔ける　（三宝）

夢幾つ崩れくずれて移民の死　（三宝）

生き甲斐を求めて死出の草鞋穿く

あとがき

一九八六年、恰度八〇才の折の或る日突然がっくりいきまして、一切の思考が停止しました。人生の限界を識らされました私は、永年に亘り闘病に明け暮れている妻と総てを空にする事を決意、身辺の整理にとりかかりました。それには勿論多少の日時を要しましたが、そうした中で唯一つ私の命を刻んで来た「川柳手帳」を棄却することに忍びず迷いに迷いましたが、当時川柳一途に精進していられた朝子さんの真摯な姿に魅せられ何か参考にでもなればと、妻の賛意の下に形見の意味も含めて、手垢で汚れた句帳を無理に納めて戴いたのが、この度発刊の句集「卍」の原本です。

あれから十年運命の歯車がどう狂ったのか凄まじい衝撃を受け、休眠状態にあった句帳が吃驚して眼を開けたのです。その瞬間側にいた盟友不知火君がそれを抱きあげ陽の光りを当ててくれたのです。

それから事態はだんだんエスカレートしまして、句集出版という夢想だにしなかった事になって終いまし

た。出版に関わる編集、校正、印刷などは既に経験のある不知火君が引き受けてくれましたが、私の希望で次の様に運んで貰ったところがありますのでご諒承願います。

作品の配列

年度別の配分も特別な添え書きも附していません。

系列と傾向

柳歴にも記しました通り、川柳を学ぶ上で方向が多岐に分かれていますのでご覧になって違和感を抱かれる事と思いますが、一句独立の建前から敢えて斯うした方法をとりました。

表　題

題字は「卍」を多少図案化したもので、表紙を赫色にしたのは私の好みです。

句集発刊は密かに進めていただいたのですが、私の最も尊敬する「ブラジル川柳社」主宰瀬古義信師か

ら身に余る序文を戴きました。光栄と感謝で一ぱいです。

今年私も九一才余命幾許もありませんが、今後一〇年二〇年後に句集「卍」が、誰方かの手で採り上げられることがあれば、その時点で生命を新たにするものと思います。

とまれ、句集を通じて私を今日あるを得さしめた全柳界の亡き人を含めての大先達の指導と、鞭撻に対し、また柳友諸兄姉の変わること無き愛情に心から敬意と感謝を捧げます。

有難う御座いました。

柳歴

出身　宮崎県　日南市

安藤　魔門　本名　善兵衛

明治三九年　二月二六日生

渡伯　昭和二年一〇月　鎌倉丸

結婚　一九三二年　野見山ヨシ子

帰化　一九五八年　移民五〇年祭

川柳句集「卍」

発　行　一九九七年七月

著　者　安藤　魔門

編集人　黒田　不知火

印刷所　トッパン・プレス印刷・出版会社